

BOOK REVIEW

ペインリハビリテーション入門

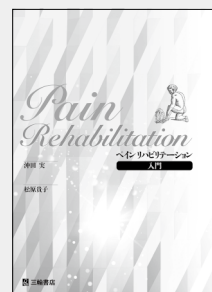
『理学療法士の専門性は痛みしかないだろう』と若い頃所属していた愛知医科大学痛み学寄附講座の教授である熊澤孝朗先生によく言われたものである。それが本当かどうかは僕にはまだわからないが、少なくとも大きな大きな領域の一つであるとは確信している。

本書を読んでみて、著者らの痛みのリハビリテーションを世の中に広めようという決意を強く感じた。秀逸なのは、痛みの評価票をこれだけ使いやすいかたちで、たくさん種類を掲載していることだと思う。もちろん、他にもそういう本はあることはあるが、使いにくいのだ。本書は臨床で痛みに向き合おうと考えた理学療法士などが最初に手に取ることを想定している本だ。きっと筆者らは、臨床で痛みに対してどうしようと悩んでいる若い理学療法士の顔を思い浮かべて本書を作ったに違いない。まさに、ペインリハビリテーション入門だ。

そして、医学は進歩する。当たり前の話かもしれないが、臨床を長くしていると自分が学習した知識がアップデートされ間

違っていったということによく出くわす。僕が痛みの研究の末席を汚していたころ、疼痛に対するオピオイドの投与は依存症になりにくいというのが主流の考え方であった。それから、10年以上経過して、アメリカではオピオイドの過剰投与による依存症が深刻な社会問題になっている。医学というものの難しさを感じるとともに、日々の学びを行う必要がある職業なのだと心から実感した出来事である。

本書はコンパクトにまとめられながら、それでも筆者らが正確性と最新性に敬意を払っていることが端々に伝わってくる。ぜひ、手に取って臨床の参考にしてほしい。必ず僕たちは痛みという症状に出会うからだ。理学療法士などが痛みというものに向き合おうと考えたとき、最初に手に取るべきは本書であると断言したい。仮に、自分は一生、痛みを抱える人を臨床で見ることはないとは断言できるのであれば本書は不要であろう。もしも、そのような人がいればという話になるが。



●**沖田 実, 他=著**
(B5/168頁/3,500円 + 税 / 三輪書店 / 2019年)

▼
評者

張本浩平

株式会社gene 代表取締役、
理学療法士